

クリムトアーテナ

THE AMBER EYES

目次

1 あらすじ(プロット)	4
2 登場人物	4
3 第1幕	5
3.1 ○ハウフル城 城下町 酒場リトル・ドラゴン (昼)	5
3.2 ○ハウフル城からクンカ・クンカ村への道 (昼)	7
3.3 ○クンカ・クンカ村 南門 (夕方)	8
3.4 ○クンカ・クンカ村 村長の家の前	8
3.5 ○クンカ・クンカ村 村長の家 (夕方)	8
3.6 ○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 (夜)	9
3.7 ○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ 食堂 (夜)	10
4 第2幕 第1場	11
4.1 ○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ 客室 (夜)	11
4.2 ○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 村道 (夜)	11
4.3 ○クンカ・クンカ村 南門周辺 (夜)	12
4.4 ○【ゲームパート：3匹の狼戦】クンカ・クンカ村 南門周辺 (夜)	13
4.5 ○クンカ・クンカ村 南門周辺 戦闘後 (夜)	13
4.6 ○クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 (夜)	14
4.7 ○【ゲームパート：狼の群れ戦】クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 (夜)	15
4.8 ○クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 戦闘後 (夜)	15
4.9 ○クンカ・クンカ村 消火後のパック夫妻の家 (夜)	16

4.1.0	○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ 食堂(夜)	16
4.1.1	○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 (朝)	17
4.1.2	○(回想)クンカ・クンカ村 南門 (朝)	18
4.1.3	○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 (朝)	19
5	第2幕 第2場	22
5.1	○鋸山 麓 (夜)	22
5.2	○鋸山 麓 (深夜)	23
5.3	○鋸山 麓 (早朝)	25
5.4	○ゲエンセン湖 (昼)	26
5.5	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 入り口付近(昼)	26
5.6	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	27
5.7	○【ゲームパート：バウワウ、クーン戦】ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	28
5.8	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	28
5.9	○【ゲームパート：ガルル戦】ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	29
5.1.0	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	29
5.1.1	○(回想)鋸山(昼)	29
5.1.2	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)	32
5.1.3	○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖 行き止まり(昼)	33
6	第3幕	33
6.1	○ハウフル城 城下町 (昼)	33
6.2	○ハウフル城 城下町 酒場リトル・ドラゴン(昼)	34
6.3	○ハウフル城 城下町 墓地(昼)	35

6.4 ○ハウフル城 城下町 (夕方)	37
---------------------------	----

1 あらすじ（プロット）

ハウフル城の城下町に住む騎士クリムトとその庇護者アテナは、シャイロックから、クンカ・クンカ村の夜警の仕事を請け負う。クリムトたちがクンカ・クンカ村についたその日の夜、村は狼の襲撃を受ける。狼はバック夫妻の家に向かい、狼の瞳を持つコハクという少年と接触しようと試みる。コハクは自分を迎えに来たのだと悟り、自ら家を出る。狼の首領ガルルは「実の父に会わせてやる」とコハクに嘘をつく。コハクは狼とともに村を去る。バック夫妻を不憫に思った村長は、密かにクリムトたちにさらなる調査を依頼する。村長の助言をもとに、クリムトたちは鋸山の一匹狼マーベリックに会い、ガルルたちの居所をつきとめる。クリムトたちは、ガルルたちのいる湖畔の洞窟に入り、話を試みようとする。しかし、そこにマーベリックがやってきて、コハクはマーベリックの子供だったことが判明する。また、ガルルたちがコハクを連れていったのは、マーベリックをおびき寄せるための罠だったことも判明する。クリムトたちとガルル一味が戦闘になる。戦闘後、死の際のマーベリックが、コハクは自分とリリイという女性騎士との間にできた子供であると明かす。その後、クリムトたちは、洞窟の奥に捕らえられているはずのコハクに会おうとするが、コハクは自力で脱出したあとだった。クリムトたちは、リリイを探してみようと、リリイがかつて住んでいたハウフル城に戻り、シャイロックに彼女の所在を聞く。シャイロックは、リリイは亡くなっており、墓があることを伝える。クリムトたちがリリイの墓に向かうと、そこにはコハクがいた。クリムトたちは、マーベリックが死んだことをコハクに伝える。コハクは天涯孤独の身になる。それを哀れんだクリムトはコハクの肖像画を描こうと決意する。

2 登場人物

クリムト・・・・・・画家になることを夢見ている騎士。

アテナ・・・・・・クリムトの庇護者。学術と芸術を司る女神。

シャイロック・・・・・・仕事の斡旋業者。

村長・・・・・・クンカ・クンカ村の村長。決断力に優れ、若くして村長になった。

バートルビー・・・・・・村長の秘書。

バック夫人・・・・・・クンカ・クンカ村で農業を営む。

バック夫君・・・・・・クンカ・クンカ村で農業を営む。

コハク・・・・・・バック夫妻の子供。琥珀色の美しい瞳の少年。

リリイ・・・・・・コハクの実の母。黄金の甲冑の騎士。

マーベリック・・・・・・一匹狼。かつて狼族の団の首領だった。群れから追い出されて放浪している。

ガルル・・・・・・狼族の好戦的な首領。額に傷跡がある。コハクを奪うためにクンカ・ク

ンカ村を襲撃する。

パウワウ・・・・・・狼族。ガルルに与する狼。

クーン・・・・・・狼族。ガルルに与する狼。

3 第1幕

3-1〇 ハウフル城 城下町 酒場リトル・ドラゴン（昼）

クリムト、テーブル席に座って、頬杖をついている。

そこにシャイロックがやってきて、クリムトの肩を叩く。

シャイロック「よお、クリムト、元気か？」

クリムト 「何だ、シャイロックか」

シャイロック「何だとは何だ」

と言って、クリムトの向かい側に座る。

シャイロック「それで・・・、仕事の方は順調かい？」

アテナ、飲み物を持って歩いてくる。そして、シャイロックのことを一瞥し、クリムトの隣に座る。アテナ、クリムトに飲み物を渡す。

シャイロック「やあ、アテナじゃないか。今日も綺麗だねえ。髪型変えた？」

アテナ、飲み物を飲んで、シャイロックをにらんだあと、そっぽを向く。

クリムト 「最近はずいぶんと仕事が減ったよ。今時、肖像画なんて流行らないのさ」

シャイロック「あんたも諦めの悪い男だねえ」

クリムト、ため息をつく。

クリムト 「で、要件は？」

シャイロック「要件？ああ、美しいアテナ嬢に会いに来たのさ」

クリムト 「よせや、まったく」

アテナ、口を尖らせている。

シャイロック「仕事、必要だろうか？」

クリムト 「まあな」

シャイロック「いやあ、あんたがいてくれて助かったよ。実はな、クンカ・クンカ村の村長から仕事の依頼があったんだ。ただし、絵の仕事じゃないぜ」

クリムト 「わかってるさ。それで、内容は？」

シャイロック「夜警だ。最近、村の近くで狼たちがうろつくようになったそうだ。だから警

護を手厚くして村の安全を守りたいと」

クリムト 「なるほどね」

シャイロック 「難しい仕事じゃない。夜になったら、村の周りを歩いているだけでいい。よっぽどのがない限り、狼の方から襲ってくるってこともないだろう」

クリムト 「そうだな。・・・それで、報酬は」

シャイロック 「1日1000ギル」

クリムト 「悪くない」

シャイロック 「むしろ良いだろう？」

アテナ、眉をひそめて、クリムトの太ももを手でゆする。

クリムト 「ちょっと待ってくれ」

シャイロック 「お好きにどうぞ」

と言って、両手を広げる。

クリムト 「どうした？」

アテナ 「あの人は信頼できないわ」

クリムト 「なぜ？こんな良い話、中々ないぜ」

アテナ 「とにかく、何か嫌な感じがするの」

クリムト 「1日1000ギルも入れば、俺たちの暮らしも少しは楽になるうさ」

アテナ 「それはそうだけど」

シャイロック 「なあ、クリムト、俺は正直に言うが、あんたは画家としても優秀かもしれないが、兵士としての才能はもつとあるぜ。・・・そいつを活かさない手は、ないわな」

クリムト 「・・・わかった、わかったから、少し静かに・・・」

シャイロック 「クリムト、すまんが、俺も用事があるんだ。バサーニオの倅に会いに行かなくてはならなくてね。そろそろ行かなくては。次に会えるのは、そうだな、1週間後だ。またその時に・・・」

クリムト 「まあ、待て」

シャイロック 「俺には時間が・・・」

クリムト 「やろう。この仕事、引き受けよう」

アテナ、目を大きく見開いて、クリムトを見る。

シャイロック 「何だって？」

クリムト 「引き受ける」

シャイロック「そうか。そうと決まれば話は早い。こいつにサインしたら、さっそくクンカ・クンカ村に向かって村長に会ってくれ。地図も渡しておく」

3¹2〇ハウフル城からクンカ・クンカ村への道（昼）

広大な荒野を、クリムトとアテナが歩いていく。

アテナ「ねえ、ねえったら」

クリムト「どうした？」

アテナ「どうしたじゃないでしょ？どうして引き受けたのよ？」

クリムト「仕事が必要だろう？」

アテナ「今度こそは芸術に打ち込むって言っていたでしょ？」

クリムト「頑張ってもダメなものはダメなんだ」

アテナ「あなたには才能があるわ」

クリムト「・・・兵士としての才能、だろう？」

アテナ「そうじゃない。芸術を愛する心が、芸術を表現する技術が、あなたにはあるわ。今は風向きが悪いだけ」

クリムト「独りの力なんて弱いものさ。時代の流れには抗えないよ」

アテナ「あなたは独りじゃないわ」

クリムト「そうだね」

アテナ「私がいるもの」

クリムト「ああ」

アテナ「だからきつと大丈夫」

クリムト「・・・」

クリムトとアテナ、黙って歩く。

アテナ「クンカ・クンカ村ってどんなところかしら？」

クリムト「ビートが有名だって聞いた」

アテナ「お砂糖をつくっているのね」

クリムト「そうらしい」

アテナ「村長、どんな人かな」

クリムト「狼がうろついているくらいで警護を依頼するくらいだから、心配性なのかもね」

アテナ「村長にしては若いて聞いたわ」

クリムト「ま、報酬さえきちんと払ってもらえれば、問題ないさ」

3-3〇 クンカ・クンカ村 南門 (夕方)

クリムトとアテナ、南門の入り口のあたりに立っている。そして周囲を眺める。

クリムト「ここ、か」

アテナ「ええ。村長の家に向かいましょう」

アテナ、村の中に入っていく。

3-4〇 クンカ・クンカ村 村長の家の前

アテナ、村長の家の玄関の前に立つ。

クリムト、後ろからついていく。

アテナ「このようね」

クリムト「ああ」

と言って、ドアをノックする。

村長の声「どうぞ」

アテナ、クリムトの顔を見る。

クリムト、ドアを開けて、家の中に入る。

3-5〇 クンカ・クンカ村 村長の家 (夕方)

木造で、質素だが、やや広い居間。大きな窓から夕日が差している。

村長、机で書き物をしている。

クリムト「あの、失礼します」

村長、顔を上げる。そして咳払いをする。

村長「む、見ない顔だね」

クリムト「私はクリムトです。こちらは・・・」

アテナ「アテナです」

村長「村長のカシワだ。何のご用ですかな？」

クリムト「シャイロックからお話を伺い、こちらに参りました。夜警をお願いしたいと」

村長「なるほど、シャイロックですか。彼は、うむ、私の友人です。契約書は？」

クリムト「こちらに」

と言って、村長の机に契約書を置く。

村長「ふむ、たしかに」

クリムト「シャイロックから聞きました。村の周囲を狼がうろついていると」

村長「ああ、そうなんだ。理由はわからないんだが、櫓で警護にあたっている者が頻繁に狼の姿を目にしている」

アテナ「以前はそうではなかったのですね？」

村長「うむ。よほどのことがない限り、彼らは人の住んでいる地域には近づかないはずなんだが。もしかすると家畜を狙っているのかもしれない。だが、安心したまえ。これまで狼との戦闘は発生していない。しかし、準備しておくに越したことはないだろう？」

クリムト「そうでしたか」

村長「ああ。騎士がいれば抑止力にもなるだろう」

クリムト「ええ」

アテナ「この任務はいつからですか？」

村長「任務は明日からだ。今日は休んでくれたまえ」

アテナ「よかった。長い道のりでしたの」

村長「ユーニという宿屋がある。そこに君たち専用の部屋を借りよう。綿のベッドがしつらえてある。料理もうまいぞ。おい、バトルビー！」

奥の扉からバトルビーが出てくる。

バトルビー「何でしょう？」

村長「こちらのクリムトさんとアテナさんをユーニに案内してくれ」

バトルビー「かしこまりました」

村長「お二人さん、明日の朝、またここに来てくれ」

アテナ「わかりましたわ」

バトルビー「ご案内いたします。こちらへ」

村長「それでは、また明日」

3-6〇クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 (夜)

宿屋ユーニ前。道は静まり返っている。遠くから虫の音が響いてくる。

バトルビー「こちらが宿屋ユーニになります」

クリムト「良いところだね」

バートルビー「ええ。何かございましたら、わたくしが承ります」
アテナ「ありがとうございます」

バートルビー「いいえ、こちらこそ感謝しております」

クリムト「まだ、何もしていないさ」

バートルビー「はは、そうですね。でも、騎士さんが来てくれた。これでみんなも安心するはずです」

クリムト「期待に応えられるように頑張るよ」

アテナ「そうね」

バートルビー「今夜の食事は特別なものをご用意いたしました。どうかお楽しみ頂ければと思います」

アテナ「ありがとうございます」

バートルビー「それでは失礼いたします」

と言って、一礼して、去っていく。

クリムトとアテナ、それを見送る。

クリムト「腹、減ったな」

アテナ「私も、お腹ぺこぺこ」

クリムト「よし、行くぞ」

アテナ「突撃！」

3-7 ○クンカ・クンカ村 宿屋 ユーニ 食堂（夜）

食堂は蝋燭の炎がゆらめいている。テーブルには、食べ終わった料理のお皿がいくつか置かれている。

アテナ「あー、おいしかったあ！」

クリムト「うん、おいしかった」

アテナ「歓待ってやつね」

クリムト「久しぶりの豪華な食事だった。なあ、この村に来て良かっただろう？」

アテナ「まだこれからよ。心を緩めてはいけない」

クリムト「そうだね」

と言って、あくびをする。

クリムト「いっぱい食べたなら眠くなってきた。ちょっと早いけど、今日はもう寝ようかな」

アテナ「そうね。明日に備えましょう」

クリムト「それじゃ、アテナ、先にいくよ」

アテナ「ええ」

クリムト「おやすみ」
アテナ「おやすみ、クリムト」

4 第2幕 第1場

4-1〇 クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ 客室 (夜)

蝋燭の光がゆらめく、しんと静まった宿屋ユーニの一室。フクロウの声や鈴虫の声、そして遠くから狼の鳴き声が響いている。
クリムト、ベッドで眠っている。

しばらくすると、鐘の音が聞こえる。

アテナ、大きな音を立てて、クリムトが泊まっている部屋のドアを開ける。

アテナ「クリムト、起きて！」
クリムト「んん」

と声を漏らして、寝返りをうつ。

アテナ「ちょっとクリムト、起きてよ！」
クリムト「うーん？」
と言って、目を覚ます。

アテナ「大変よ」
クリムト「うーん、いったい何が・・・」
アテナ「村が狼に囲まれたの！」
クリムト「村・・・狼・・・」
アテナ「ちよっと！しっかりして！」

クリムト、目をこする。

クリムト「大変だ！」
アテナ「大変よ！」
クリムト「すぐに準備する！」

4-2〇 クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 村道 (夜)

クリムトとアテナ、宿屋から村道に出る。遠くから狼の遠吠えが響いている。村人が一人、村道を走ってくる。

村人A「大変だ！腹を空かした狼たちが襲ってくるぞ！」
と言って、走り去っていく。

うしろから、もう一人、村人が走ってくる。

バートルビー「クリムト様！」

クリムト「いったい、何があったのです？」

バートルビー「わかりません。とにかく、急にです、気がついたら狼たちが村を取り囲んでいたのです・・・！」

クリムト「わかりました。私も協力します」

バートルビー「クリムト様、感謝致します！今、村人が総出で狼たちを追い払っています。しかし、南門が手薄になっています。どうしても人手が・・・」

クリムト「南門、ですね。すぐに向かいます」
バートルビー「ありがとうございます！私は村長のところに向かいます。どうかご無事で！」

バートルビー、村道を走っていく。クリムトとアテナ、互いに見合って頷き、バートルビーが走っていった方向とは反対方向に走っていく。

4.3〇クンカ・クンカ村 南門周辺 (夜)

巨大なたいまつが炎で轟々と燃えている。赤みがかった光が南門の周囲を照らしている。

村人B、3匹の狼（ガルル、バウワウ、クーン）に囲まれている。

村人B「くそっ！あっちへ行け！」

額に傷のある狼（ガルル）が村人Bに飛びかかる。

村人B「うわ！」
と言って、倒れる。

アテナ「クリムト！」

クリムト「わかってる！」

4.4〇【ゲームパート…3匹の狼戦】クンカ・クンカ村 南門周辺 (夜)

3匹の狼(ガルル、バウワウ、クーン)との戦闘イベント。

4.5〇クンカ・クンカ村 南門周辺 戦闘後(夜)

3匹の狼、後退し、倒れている村人Bから離れていく。

クリムト「なぜ村を襲う？」

ガルル「(狼語) グウウ・・・」

アテナ「え？どういうこと？」

クリムト「何だって？」

アテナ「子供を渡せって言っているわ」

村人B「(悶えながら) 何かの間違いだ・・・。この村には子供の狼なんかない・・・。
私たちは狩りはしない・・・」

クリムトとアテナ、狼たちの表情を見る。

ガルル「(狼語) グウー・・・、ワウツ」

アテナ「嘘をつくな、だって・・・」

クリムトと3匹の狼が睨み合う。

クリムト「まだ戦うか？この村から離れていけ！」

3匹の犬が後ろを向いて、暗闇の中に消えていく。そして暗闇の奥から遠吠えが響く。そして周囲がしんと静かになる。

次の瞬間、大勢の狼たちが走ってくる。狼たちはクリムトたちを無視して、どんな村の中に駆け込んでいく。

クリムト「まづい・・・」

村人B「妻と子供たちが、危険だ・・・」

クリムト「立てるか？」

と言って、村人Bの手を取る。

村人B 「ああ、くそっ」

と言って、村人Bが立ち上がる。

クリムト 「女性と子供たちはどこに？」

村人B 「それぞれの家でじっとしているはずだが・・・」

アテナ 「ねえ」

クリムトと村人B、アテナのほうを見る。

アテナ 「何か変だわ」

クリムト 「どうした、アテナ？」

アテナ 「狼たちがみんな同じ方向に走っていった」

クリムト 「つまり？」

アテナ 「つまり、目的の場所がわかっているんじゃないかしら？」

村人B 「あっちには、バック夫妻の家がある・・・」

クリムト 「急いで後を追わなければ」

アテナ 「ええ」

村人B 「クリムトさん、すまないが、私には子供がいて・・・」

クリムト 「君は家に戻るんだ」

村人B 「恩に着る」

クリムト 「アテナ、行こう」

アテナ 「ええ」

4.6〇クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 (夜)

狼たち、バック夫妻の家を囲んでいる。バック夫君、玄関扉に立ち、ピッチフオー
クを構えて狼たちを威嚇している。

アテナ 「まずいわ！」

クリムト 「大丈夫ですか！」

バック夫君 「・・・大丈夫だ！くそ、負けてたまるか！」

バック夫人、二階の窓からクリムトたちに叫ぶ。

バック夫人 「どうかお助けを！中に子供が！」

4-7〇【ゲームパート：狼の群れ戦】クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 （夜）
狼の群れとの戦い。

4-8〇クンカ・クンカ村 パック夫妻の家 戦闘後 （夜）
クリムトたち、何匹か狼を撃退するも、狼たちは退かない。さらに背後から、狼の増援がやってくる。

パック夫君「なんてこった。これじゃあ埒があかない」
クリムト 「どうする・・・」

アテナ 「あなたたち、何が目的なの！」

狼たちが、クリムトたちに迫っていく。
家の中から、パック夫人の叫ぶ声がする。

パック夫人「コハク！外に出てはダメ！」

コハク、玄関の扉を開け、クリムトたちの背後に現れる。そしてそのまま狼たちの群れに向かって歩いていく。

パック夫君「お、おい、コハク、何をやっているんだ」

コハク、狼の群れの中に入る。

コハク 「やっぱり、そうだったんだ」
と言って、クリムトたちの方を向く。コハクの琥珀色のきれいな瞳がきらりと光る。

コハク 「ぼくを、迎えに来たんだね？」
とガルルに話しかける。

ガルル 「グウウ・・・」
コハク 「本当かい？わかった」

パック夫君「いったい、どういうことだ・・・？何がおきている？」

コハク 「お父さん、お母さん、さようなら」

コハク、狼たちの群れに紛れて、走り去っていく。

バック夫人「コハク！」

と言って、玄関から飛び出してくる。

バック夫人「ああ！なんてこと！」

と言って、泣き崩れる。

村のどこからか「火事だ！」という声が響く。

バートルビー、バック夫妻の家の裏手から走ってくる。

バートルビー「火事だ！家の裏に火がついているぞ！」

クリムト「さあ、バック夫人、避難してください」

アテナ「さあ、こちらへ」

と言って、バック夫人に肩を貸す。

419〇クンカ・クンカ村 消火後のバック夫妻の家 (夜)

バック夫妻の家は、半分焼け落ちている。夜の闇の中に、黒煙がゆっくりと登っていく。

バック夫人、土手に座りこんでいる。

バック夫人「何てこと……。わたしはすべてを失ってしまったわ」

アテナ「ご夫人、心配なさらないで。コハクさんはきっと無事よ」

バック夫人「あの子は、あの子は特別な子だったの……」

クリムト、アテナの背後から歩いてくる。

アテナ、クリムトの顔を見て、首を振る。

アテナ「ご夫人、まだここは危ないわ。私たちの泊まっている宿があるから、今日はそこに泊まりましょう」

バック夫君、後ろから歩いてくる。

クリムト、アテナの顔を見て、頷く。

4110〇クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ 食堂 (夜)

質素な造りの食堂。

アテナ、一人で椅子に座っている。

クリムト「ご夫人の様子はどうかい？」

アテナ、首を振って、

アテナ「シヨックが大きかったみたい。しばらく泣き叫んだあと、力尽きたように眠ってしまっただわ」

クリムト「そうか」

アテナ「バック夫君は？」

クリムト「動揺していたが、今は落ち着いている。しつかりした人だ。雨風が彼の精神を強くしたんだろう」

アテナ「あの、バック夫妻の子供のことなんだけど」

クリムト「コハク、かい」

アテナ「ええ。何か裏がありそうね」

クリムト「そうだね」

アテナ「あの狼たち、はじめからコハクが狙いだったのよ」

クリムト「そのようだね。コハクには特別な何かがあったのだろうか？」

アテナ「そうとしか考えられないわ。バック夫妻の様子が落ち着いたら、話を聞いてみましょう」

クリムト「ああ、そうだね。アテナ、君は大丈夫かい？」

アテナ「急にどうしたの？わたしはあなたの庇護者よ。あなたはあなたの心配をしていればいい。わたしは大丈夫よ」

と言って、アテナが笑う。

アテナ「あなたらしくないわ」

クリムト「ああ、いや。ちよつと疲れているのかもしれない」

アテナ「クリムト、あなたももう休んだら？」

クリムト「そうするよ。朝が来るまで、しばらく休ませてもらう」

アテナ「ゆっくり休んで」

クリムト「君も。おやすみ」

と言って、食堂を出ていく。

アテナ、クリムトが食堂を出ていくまでその姿を目で追う。

アテナ「・・・」

4-111 ○クンカ・クンカ村 宿屋ユーニ前 (朝)

宿屋ユーニ前では、眩しい朝日が差し、鳥のさえずりが響いている。

アテナ、バック夫妻、道に立っている。

クリムト、出入り口から出てくる。

アテナ 「良く眠れたようね」

クリムト 「・・・良く眠りすぎた」

バック夫人「お二人様、昨日はありがとうございました。あなたがたの協力がなければ、私たちの命はなかったかもしれない」

バック夫君、うなづく。

アテナ 「いいえ。当然のことをしてただけですわ」

クリムト 「そうですとも」

アテナ 「ご気分はいかがですか？昨夜よりは・・・」

バック夫人「私たちの息子、コハクのは、まだ胸が痛みます」

バック夫君、口を固く結ぶ。

アテナ 「実はその、お聞きしたいことがあるのです」

バック夫人「コハクのことですね？」

アテナ 「そうです」

バック夫婦、お互いの顔を見合う。

バック夫人「私たちは、あの子の実の親ではないのです」

4120 (回想) クンカ・クンカ村 南門 (朝)

バック夫人、南門へ続く道を歩いていく。

バック夫人の声「あの子に出会ったのは、14年前のことです。私は、農作業のために、畑に向かっていた。そのころは、南門をすぐ出たところにトウモロコシ畑があったのです」

バック夫人、南門を通過しようとするところ。

バック夫人の声「南門を出ようとしたちょうどその時でした。赤ん坊の鳴き声が聞こえてきたのです。初めはか細かった声が、次第にはっきりとした鳴き声になっていった。まるで私は導かれるようにして、鳴き声の方へと近づいていきました。そこには藁あみのバスケットが置いてあった。覗き込んでみると、白い百合の刺繍が入った毛布に包まれた、コハクがいたのです。コハクからは、バラのような香水の良い香りがしていた・・・」

赤ん坊、バスケットの中で泣いている。

バック夫人の声「私はコハクを抱き上げました。すると、さっきまで泣いていたコハクが泣き止んだのです。そして、コハクが私をじっと見つめたのです。琥珀色の、透き通った、美しい瞳で。私は全てが見透かされたかのような気持ちになりました。私は運命だと思いました。この子を保護しなくてはならないと。もちろん、はじめは戸惑いました。近くに母親がいるんじゃないかと。けれど、こんな朝に、こんな場所に子供をひとりにする母親がいるかしら？ 結局、私は、自分の衝動を抑えきれず、そのままコハクを家に連れて帰ったのです」

4-13〇クンカ・クンカ村 宿屋ユー二前 (朝)

クリムト「そんな過去が・・・」

バック夫人「ええ。そうなのです。私たちはずっと働き詰めだった。そんな時に、ちょうどコハクが、まるで何かのお告げのように現れたのです。そしてそれ以降、私たちはそれまでより一層明るく、楽しい家庭を築けたのです」

アテナ「・・・琥珀色の瞳、とおっしゃいましたね」

バック夫人「・・・ええ」

アテナ「もしかすると、それは狼の瞳では？」

バック夫人「狼の瞳？」

アテナ「ええ、狼族の特徴のひとつです。狼族は、美しい琥珀色の瞳をしているの」

クリムト「えっと、つまり、その少年は狼族だったということ？」

アテナ「おそらくね」

クリムト「でも、そんなのおかしいじゃないか。コハクは人間だった・・・」

アテナ「・・・人間と狼族の間に出来た子供」

クリムト「・・・そんなことって」

バック夫人、悲しそうな顔で、やや俯いている。

バック夫人「思い当たるふしは、あるのです。コハクはどこか特別なところがあった。コハ

クは、匂いで私たちがどこに行っていたかを当てた。どんな作業をしていたのかも。それ以外には、そう、コハクがある日突然『村長が来たね』と言ったの。私は窓から外を見てみたわ。すると、遠くから村長が歩いてくるのが見えた」

バック夫君「ああ、こういうことはたくさんあったよ。コハクは勉強もいつも一番を取ってきたし、駆け足は誰よりも早かった」
と言つて、やや笑顔になり、そして沈んだ顔になる。

バック夫君「だが、今となつては・・・」

村長「バック夫妻、そしてクリムトさん、アテナさん。実はお話を聞いておりました」

バック夫人、やや俯く。

村長「このような大変なことがあったときにすまないが、バック夫妻に伝えておくべきことがある」

バック夫君、村長の顔を見る。

バック夫人「何でしょう？」

村長「申し訳ないのだが、村から出ていってもらいたいのだ」

クリムト「なんだって」

村長「今回の狼襲撃事件の原因は、いわばバック夫妻、あなたたちにある」

バック夫君「しかし・・・」

村長「村人を危険にさらすわけにはいかない。あなたたちが残っているとまた狼たちがやってくるかもしれない」

アテナ「そんな・・・。狼たちはもう目的を果たしたんじゃないかしら？」

村長「すまないが、村の安全を守らなければならない。そのためには、小さな危険も排除せねばならん」

バック夫人「なんてこと！」

村長「落ち着いて聞いてくれ。私も手ぶらで出ていけとは言わん。村のはずれにある丘のあたりに、もう誰も住んでいない牧場があるのを知っているだろう？そこに新しい家を建てよう。家ができるまでは、牧場の小屋で暮らして欲しい」

バック夫人、涙を流す。

パック夫君「仕方ないさ。また私たち二人で元気に暮らそう」
と言って、パック夫人の肩を抱く。

村長 「村のはずれの牧場までは、バートルビーが案内する。お昼過ぎに出発しよう。
それまではユーニで待っていてくれ」
パック夫君「さあ、中へ入ろう」

パック夫妻、ユーニの中に入っていく。

村長 「村の者たちがコハク君の秘密を知ったら、大変な騒ぎになるだろう」

クリムトとアテナ、黙っている。

村長、咳払いをする。

村長 「実は、あなたがたに頼みたいことがありますな」

クリムトとアテナ、村長の方を向く。

アテナ 「まだ、何か？」

村長 「コハク君の行方を追って欲しいのだ」

アテナ 「なぜです？」

村長 「私は村を守らなければならなんのでな。狼たちがまた我々を襲うようなことがないか、調査して欲しいのだ。そのためには、コハク君の行方を追う必要があるだろう？」

アテナ 「そうですね」

村長 「そして・・・、ついぞと言ってはなんだが、コハクの出生についても調べて欲しい。分かる範囲で良い。追加報酬は私が出そう」

アテナ 「・・・よろしいのですか」

村長 「ああ、パック夫妻もそれを望んでいるはずだ」

アテナ 「わかりました」

アテナ、クリムトに目配せする。
クリムト、頷く。

アテナ 「しかし、どこに向かえば良いか・・・」

村長 「北に、ここからさらに北へ進み、川を越え、森を抜けると、岩山が見えてくる。

鋸山だ。その頂上に、とある狼が住んでいる。マーベリックという一匹狼だ」

アテナ 「何者？」

村長 「かつては狼族の首領だった狼だ。しかし、今は群れから離れてローンウルフとして生きている」

クリムト 「鋸山のマーベリック・・・」

村長 「君たちには期待しているよ。それでは、また会おう」

村長、去っていく。

アテナ 「クリムト、どうする？」

クリムト 「準備ができたなら、さっそく行こうか」

5 第2幕 第2場

5-1〇鋸山 麓 (夜)

ごつごつとした岩肌がむき出しになっている山。岩の隙間から少しだけ丈の低い高山植物が生えている。

アテナ 「ここが鋸山・・・」

クリムト 「やれやれ。ずいぶん歩いたな」

アテナ 「本当にこんなところに狼が住んでいるのかしら？」

クリムト 「よほどの物好きらしいね」

アテナ 「今日はここらへんで野宿したほうが良さそうね」

クリムト 「ああ、そうだな。俺は薪を集めてくるよ」

アテナ 「うん。お願い」

数時間後、クリムトとアテナ、焚き火を囲んでいる。

アテナ 「コハク、どこに行ってしまったのかしら」

クリムト 「さあな。どこか深い森の中にでもいるんだろう」

アテナ 「彼、これからどうやって暮らしていくのかしら」

クリムト 「狼たちと一緒に行動するつもりなんだろう」

アテナ 「私、狼族が彼を受け入れるとは思えないのよ」

クリムト 「どうして？」

アテナ 「コハクには、狼の血が流れているけれど、人間の血も流れているのよ。狼族がそれを許せるかしら？」

クリムト「けれど、わざわざ村まで来て、コハクを奪っていったんだぜ」

アテナ「そうだけど・・・」

クリムト「君は考えすぎだよ。コハクはもう狼族の元で幸せに暮らしているのかもしれない。実の両親にも会えたかもしれないし」

アテナ「狼族は単一文化主義で知られているわ。それなのに、人間と狼の合いの子を奪うなんて、何か事情がありそうだって気がしたの」

クリムト「考え方が変わったんじゃないか？」

アテナ「狼族にも長い歴史がある。そんなに急に考え方が変わるとは思えないの。人間だってそうでしょ？」

クリムト「まあな」

と言って、あくびをする。

アテナ「今あれこれ考えて仕方ないのだろうけれど」

クリムト「そうだよ。今日はもう寝よう」

アテナ「ええ」

クリムト、その場で横になる。

アテナ「おやすみ」

クリムト「おやすみ」

5.2〇鋸山 麓（深夜）

遠くからフクロウの鳴き声が響いている。焚き火が消えかけている。

アテナ、目を覚ます。

アテナ「誰？」

クリムト、眠ったまま。

アテナ「いるんでしょう？」

一匹狼のマーベリック、姿を現す。

アテナ、息を殺して、クリムトをゆする。

クリムト「どうした？」

マーベリック、静かにその場に佇んでいる。

クリムト、身を起こして、戦闘態勢に入る。

マーベリック「君たちを襲うつもりはない。君たちが私を襲ってこない限り」

クリムト「人間の言葉が、話せるのか・・・？」

マーベリック「その通り」

アテナ「危害を加えるつもりはありませんわ。私たちはマーベリックという狼を探しているのです」

マーベリック「私がマーベリックだ」

クリムト「あんたが？」

マーベリック「それで、なぜ私を探していたのだね」

アテナ「コハクという少年を探しているのです」

マーベリック「コハク？誰だね」

アテナ「コハクは、おそらく狼と人間との間に生まれた子供です」

マーベリック「狼と人間との間に生まれた子供だって？」

アテナ「ええ」

マーベリック「なぜそう考えた？」

アテナ「彼は狼の瞳を持っていた」

マーベリック「狼の瞳・・・。そうか」

マーベリック、眉間にしわを寄せて黙る。

アテナ「それで、狼族の団が、コハクを連れ去ってしまったのです。私たちは彼らの行方を追っています」

マーベリック「（ため息をついて）そうか。それで、連れていったのは、どんなやつらだった？」

アテナ「額に傷のある狼がいました。彼が首領だったように思います」

マーベリック「ああ、ガルルだな」

クリムト「知り合いかい？」

マーベリック「知り合いもなにもかつて一緒に暮らしていた」

クリムト「では、ガルルの居場所を知っているのではないか？」

マーベリック「知っているとも。その前に、君たちとコハクの関係について教えてくれないか？」

クリムト「直接的な関わりはないよ。クンカ・クンカ村の村長が、ガルル一団とコハクの出生の秘密について調査を、我々に依頼したんだ」

アテナ「それと、コハクの育ての親であるバック夫妻の悲しみを癒すためでもある」

マーベリック、しばらく黙る。

マーベリック「・・・バック夫妻。それだけか？」

クリムト「そうだ」

アテナ「マーベリック、ガルルの一団はどこにいるの？」

マーベリック「ここからさらに北に向かい、岩山を下ると、ゲエンセンという湖がある。彼らはその周囲を主な縄張りとしている」

クリムトとアテナ、互いに見合って頷く。

アテナ「マーベリック、コハクのことについては、何かご存知ではないかしら？ 父親

や母親のことについて・・・」

マーベリック「狼と人間との間に子供が生まれたという伝聞を耳にしたことはある。だが、それだけだ」

クリムト「ところで、あんたはどうして独りでいるんだい？」

マーベリック「あんたたちには関係のないことさ」

クリムト「そうか。深くは聞かないでおくよ」

マーベリック「ガルルのところへ向かうのかい？」

クリムト「ああ、朝になったら、ここを経つよ。もう邪魔はしない」

マーベリック「気をつけることだ。ガルルは力でのし上がった男だ。血の気が多く、怒らせると手が付けられない」

クリムト「戦うつもりはないんだ。友好的に話しをするつもりさ」

マーベリック「うまくいくといいがな・・・」

マーベリック、クリムトたちに背を向けて、岩山を登っていく。

アテナ「ああ、私、びっくりしちゃった」

クリムト「そうだね。けれど、探す手間が省けた。朝が来たらここを出よう」

アテナ「ええ、そうしましょう」

5-3〇 鋸山 麓 （早朝）

真っ青な空が広がっている。遠くから鳥のさえずりが響いている。

アテナ「準備できた？」

クリムト「できた」

アテナ 「行きましょう」

マーベリック、クリムトとアテナが発発するのを、上方から目で追っている。

5.4〇ゲエンセン湖 (昼)

森の中に開けた場所があり、そこに湖が広がっている。鳥のさえずりが響いており、平和な雰囲気漂っている。

アテナ 「静かね」

クリムト 「ああ、本当にこんなところにいるのかな」

湖の向こうに、狼が一匹佇んで、クリムトたちの方を見ている。

クリムト 「おい、あれ」

と言って、指を差す。

狼が、森の小道に向かって走っていく。

アテナ 「向こうに行ったわ」

クリムト 「あとを追ってみよう」

5.5〇ゲエンセン湖のほとりの洞窟 入り口付近 (昼)

暗くて、やや湿気があるような洞窟。土はやわらかく、狼たちの足跡がたくさん残っている。コウモリの糞なども地面に落ちている。

クリムト 「ここにいるのだろうか」

アテナ 「入る？ ちょっと危険そうだけど・・・」

クリムト 「どの道、危険であることは変わらないさ」

アテナ 「私、こういうところ苦手」

クリムト 「大丈夫だよ。狼たちに警戒しながら、先に進んでみよう」

アテナ 「ええ」

アテナ、たいまつを灯す。

クリムト 「よし、行こう」

5-6〇ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖（昼）

洞窟の奥に進んでいくと、天井が崩れた鍾乳洞がある。天井からは太陽の光が差し込み、洞窟湖の水を煌めかせている。

さきほどクリムトたちが見た狼がクリムトたちの方を向いている。背後では、たくさん狼たちが眠っている。その中に、ガルルやバウワウ、クーンもいる。狼が吠える。すると、ガルルが耳をぴくりと動かし、片目を開ける。

アテナ 「（狼語で）あの、おやすみ中にごめんなさい」

狼たちがいつせいに目を覚ます。そして、うなり始める。
ガルル、前に出てくる。その後ろにバウワウ、クーンと続く。

アテナ 「（狼語で）誓って戦いに来たわけではありません。誓って・・・」

クリムト 「我々は話し合いのために来た」

アテナ 「（狼語でクリムトの言葉を繰り返す）」

クリムト 「例の少年、コハクのことだ」

アテナ 「（狼語でクリムトの言葉を繰り返す）」

クリムト 「戦うつもりはない」

アテナ 「（狼語でクリムトの言葉を繰り返す）」

ガルル 「（狼語で）また嘘をつくのか？」

アテナ 「また嘘をつくのか、だって・・・」

クリムト 「何？」

ガルル 「（狼語で）後ろにいるやつとグルなんだな」

アテナ 「後ろにいるやつとグルなんだな・・・？」

クリムトとアテナ、後ろを振り返ると、そこにはマーベリックがいる。

アテナ 「マーベリック？」

クリムト 「どうしてここへ？」

マーベリック、牙をむきながら前に出てくる。

マーベリック 「私の息子を返せ」

ガルル 「(狼語) これはこれは、あんたのほうから出向いてくれるとはね。おかげで

手間が省けたよ」

クリムト 「私の息子？コハクは、マーベリックの子供だったのか・・・！」

マーベリック「ガルルよ、なぜこんなことをしたのだ？なぜ、過去を掘り返すような真似を」

ガルル 「(狼語) むろん、あんたをおびき出すためだ。あんたの息子を囿にしてな」

マーベリック「狙いは私か・・・。どうしてそこまで私にこだわる？私は群れを出て、お前たちとは絶縁したはずだ」

ガルル 「群れの慣習を破ったあんたを殺せば、私の名声は高まり、群れの結束は強まる。あんたを憎んでいるものは、ここに大勢いる。私たちの意思は揺るがな

い」

マーベリック「慣習が何だ？名声がなんだ？自縄自縛じゃないか。誇り高き狼としての自負はどこにいったのだ？我々は何ものにも縛られず、自由に生きていくはずではなかったのか？・・・お前たちは犬に成り下がった」

ガルル 「いまだに個性主義の理想を説くのかね？時代が違うのだよ、時代が」

マーベリック「どうやら私たちはわかりあえないらしいな」

ガルル 「そうだ」

マーベリック「私の息子はどこだ？息子は返してもらおう」

ガルル 「このさきにいるよ。だが、その前にお前をくたばらせてやる。その騎士どもも一緒にな」

マーベリック「おい、準備はいいな？」

クリムト 「ああ、いいぞ」

アテナ 「ええ・・・」

マーベリック、走り出し、ガルルに飛びかかる。

バウワウとクーン、そのほか大勢の狼たちが、クリムトたちを襲う。

5-7〇【ゲームパート：バウワウ、クーン戦】ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)

クリムトとアテナ、バウワウ、クーン、そのほか大勢の狼との戦闘イベント。

5-8〇ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖(昼)

クリムトとアテナ、息が荒い。

マーベリック、ガルルに組み伏せらせてしまう。そして血を流して、意識を失う。

ガルル「次はお前たちだ」

と言って、クリムトとアテナに襲いかかる。

5-9〇【ゲームパート…ガルル戦】ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖（昼）
クリムトとアテナ、ガルルとの戦闘イベント。

5-10〇ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖（昼）

クリムトとアテナ、ガルルを倒す。

残り数匹、狼がいるが、逃げ出していく。

クリムトとアテナ、倒れているマーベリックの方に近づいていく。

クリムト「マーベリック！」

アテナ「しっかりと、マーベリック」

マーベリック、目を開いて、クリムトたちを一瞥する。

マーベリック「私ももう歳だな」

クリムト「しっかりと、息子さんに会いに行こう。もうやつらはいない。退治したんだ」

マーベリック「母親の名前はリリイだ」

クリムト「え？」

マーベリック「コハクの母親はリリイという名の騎士だった。かつて、ハウフル城の城下町に住んでいた。雪のように白い肌に、黄金の甲冑・・・」

クリムト「・・・このままだと危険だ。村で治療しよう」

マーベリック「ダメだ。遠すぎる。私のことは忘れてくれ。そして、話を聞いてほしい」

クリムト、アテナの顔を見る。アテナは首を振る。

クリムト「わかった。続けてくれ」

5-11〇（回想）鋸山（昼）

鋸山の険しい道を、マーベリックが登っていく。

マーベリックの声「リリイと出会ったのは、私がまだ首領だった頃だ。私には習慣があった。

それは鋸山に登ることだった。あそこはとくべつ見晴らしがいい。世間の流れや、宇宙の鼓動を感じることができる。そして、自分はただの一個の肉体なのだということが実感できる。しょせん、首領と言えども、最終的には孤独な存在なのだと、実感できる・・・」

マーベリック、鋸山の頂上につく。

マーベリックの声「ある日、私はいつものように山に登っていった。頂上から下を見下ろすと、人間がうずくまっているのが見えたんだ」

リリイ、崖にうずくまっている。

マーベリックの声「それがリリイだった。リリイはどうやら下山途中に滑落してしまったらしかった」

マーベリック、リリイの元に向かい、リリイと向かい合う。

マーベリックの声「リリイは言った。『水が欲しい』と。ずいぶん衰弱していた。私は湖まで駆けていった」

マーベリック、岩山、森を駆け抜けていく。

マーベリック、湖で、水を汲み、来た道を戻っていく。

マーベリックの声「そして水を汲み、リリイのところへ戻った。もちろん、私の一団のものには秘密でな。狼族が人間を助けるなんてもってのほか。そう考えているのが普通だったからだ」

マーベリック、再びリリイと向かい合う。そして、リリイに水を渡す。

マーベリックの声「水を飲んだリリイは『ありがとう』と言った。そして『あなたは誰?』と聞いた。私は『マーベリックだ』と答えた。すると、リリイは何か呟いたあと、意識を失った。危険な状態だった」

マーベリック、リリイを担ぎ、岩山を駆け下りていく。そして、荒野を走っていく。クンカ・クンカ村が見えてくる。

マーベリックの声「私はリリイを担いで、クンカ・クンカ村まで駆けた。そして、医者家の前に彼女を横たえて、ドアを鳴らして、私は去った」

マーベリック、医者家の前にリリイを置き、去っていく。

マーベリックの声「湖に戻ってこられた次の朝だった」

マーベリック、湖の周りを歩く。他の狼たちが、マーベリックの様子を怪しんでいる。

マーベリックの声「一団は私を何をしていたのか訝しがった。無理もない。人間の汗と血の匂いが染み付いていたんだ。狼族の感覚には単一主義が染み付いている。他の部族を排除したがる傾向にある。それなのに、首領の体から人間の匂いがする。その日の一団は挙動がよそよそしかった。特にガルル、やつはな。ゲホッ、ゴホッ」

アテナの声 「大丈夫・・・？」

マーベリックの声「・・・ああ、続けよう。リリイを助けて、一週間が過ぎたころ、眠れなかった私は、独り鋸山に登っていった」

マーベリック、夜の鋸山をひとり登っていく。

マーベリックの声「月は明るく、空気は澄んでいた。静かな夜だった。まるで私の体が宇宙と一体になったかのような感覚。そして、私が頂上につくと、おお、何と云うことだろう、そこにはリリイがいた。彼女は私を待っていたんだ」

マーベリックとリリイ、頂上で向かい合っている。

マーベリックの声「私を見るなり、彼女は言った。『マーベリック、あなたを待っていました』と。私は答えた『なぜだね。助けた礼ならいらないよ』と。すると、彼女は言った。『私の庇護者になってくださいませんか』と」

アテナの声 「あなたはリリイの庇護者になったのね？」

マーベリックの声「ああ、そうなんだ。そして、息子、君たちはコハクと呼んでいるね、コハクは、そのあとすぐに生まれた。しかし、それが問題となった。リリ

イの庇護者になったことを知っているのは、信頼できるとき少数のものだけだった。しかし、秘密はすぐにばれてしまう。一団で、私が人間の庇護者になったこと、そして子供がいるということが知れ渡ってしまった」

アテナの声 「狼たちは、それを許さなかった」

マーベリックの声 「そういうことだ。私は半ば追い出されるようにして、群れを出ていった。しかし、悔いはなかったんだ。なぜなら、これから第二の人生が、リリイとの旅が始まるはずだったからだ。だが、そううまくいかなかったんだ。狼たちがリリイとコハクの命を執拗に狙うようになった。半ば暴徒化した強烈な嫉妬心がそうさせたんだ。私はリリイに逃げるように言った。私を残して遠くに行きなさいと。そうすれば、君とコハクの命は助かる、と。私は鋸山に残って、狼たちの動きを牽制すると」

アテナの声 「リリイはコハクを連れて逃げたのね」

マーベリックの声 「そうだ。それ以降、私はリリイと息子とはずっと会っていない。どこに行ったのかも、知らなかった」

アテナの声 「きつと、リリイは逃げる途中、クンカ・クンカ村にコハクを置いていったのね・・・」

マーベリックの声 「おそらく、そうなんだろう。コハクを、私たちの息子ではなく、別の人間の息子であるかのように偽装すれば、安全が確保されと考えたのかもしれない」

アテナの声 「そういうことだったのね」

5・12〇ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖（昼）

マーベリック 「これが、私とリリイのすべてだ。もう話すことは何もない」

アテナ 「リリイはどこにいるのかしら・・・？」

マーベリック 「放浪の旅をつづけているのかもしれない。あるいは、生まれ故郷に戻ったか」

アテナ 「ハウフル城ね」

マーベリック 「ああ」

マーベリック、咳き込む。

マーベリック 「リリイと息子によろしくな」

クリムト 「おい！しっかり！」

マーベリック、息をひきとる。

アテナ 「死んでしまった」

クリムト 「なんてこった」

アテナ 「彼の意味は私たちが引き継ぎましょう。コハクのところへ急ぎましょう」

5・13 ○ゲエンセン湖のほとりの洞窟 洞窟湖 行き止まり (昼)

行き止まりはがらんとしている。狼が2匹、倒れている。木の根っこにロープがくくりつけてあるが、切れている。

クリムト 「誰もいない」

アテナ 「この様子だと・・・」

クリムト 「逃げたように見える」

アテナ 「そうね」

クリムトとアテナ、沈黙する。

クリムト 「コハクの行方の手がかりは何ひとつない」

アテナ 「そうね……。それなら、ハウフル城でリリイさんを探してみるのはどうかしら？」

もし、リリイさんが見つからなければ、そこまでを村長に報告しましょう」

クリムト 「そうだね。少なくとも狼たちは退治して、村の安全は確保されたわけだ」

アテナ 「ええ。ハウフル城に向かいましょう」

6 第3幕

6・1 ○ハウフル城 城下町 (昼)

クリムトとアテナ、城下町の道を歩いていく。

クリムト 「なあ、アテナ、マーベリックがリリイは騎士だったって言っていたよな？」

アテナ 「ええ」

クリムト 「もしかして、シャイロックがリリイのことについて何か知っているんじゃないか？」

アテナ 「そうかもしれない」

クリムト 「シャイロックに当たってみるか」

アテナ 「ええ、そうしましょう」

6¹/₂〇ハウフル城 城下町 酒場リトル・ドラゴン (昼)

シャイロック、テーブルに突っ伏して眠っている。

クリムト、後ろから近づいていき、肩を叩く。

クリムト 「おい、シャイロック」

と言って、肩をゆする。

シャイロック 「うん？何だ、クリムトじゃないか」

クリムト 「(少し笑って) 何だとは何だ」

クリムトとアテナ、シャイロックの向かい側に座る。

シャイロック 「例の仕事、終わったのかい？」

クリムト 「いや、まだなんだ」

シャイロック 「おいおい、じゃあどうして戻ってきた？」

クリムト 「まあまあ。こっちにも事情があるんだ。風向きが変わったんだよ。ところで・・・」

シャイロック 「何だ？」

クリムト 「あんたに聞きたいことがある」

シャイロック 「俺に？節税の方法かい？それなら腕のいい税理士を・・・」

クリムト、手で話を遮る。

クリムト 「リリイという女性騎士、知らないか？」

シャイロック 「リリイ？昔、あんたと同じように仕事を斡旋してやったことがある。しかし、彼女が騎士をやめてからは、まったく会わなくなった」

クリムト 「そうか。リリイが今どこにいるか、知っているかい？」

シャイロック 「城下町のはずれにある墓地だ」

クリムト 「墓地？そこで働いているのかい？」

シャイロック 「違う。リリイは死んだんだ。リリイは死んでいる」

クリムト 「何だって？」

と言って、首を振る。そして、アテナと目を合わせる。

シャイロック 「つい3週間前のことだ。病気だったと聞いた。彼女、自分が死ぬということ

を自覚していたらしい。大家に埋葬を頼むとお願いしていたらしいんだ。埋葬にかかる費用も多すぎるほど大家に渡したそうだ」

クリムト 「そうか。わかった。ありがとう。シャイロック、また会いに来るぜ」

クリムトとアテナ、立ち上がる。

シャイロック「おい、クリムト、もう終わりか・・・」

クリムトとアテナ、酒場を出ていく。

6-3〇ハウフル城 城下町 墓地 (昼)

広大な敷地の墓地。その中に白いユリの花が咲いている墓がある。そして、そこに少年が立っている。

クリムトとアテナ、ユリの花の墓に近づいていく。

墓石には、【Lily】と名前の刻印がある。

少年は、じっと墓石を見つめている。

コハク「母は、死んでしまいました。病気だったと聞きました。僕がもう少し早く来ていれば間に合ったかもしれない」

アテナ「あなたは、コハク？」

コハク「そうです。どうして僕の名前を？」

アテナ「クンカ・クンカ村が狼に襲われたとき、私たちはそこにいたの」

クリムト、頷く。

コハク「・・・狼からお父さんとお母さんを守っていた人？」

クリムト「そうだ」

コハク「どうしてここへ？」

クリムト「君の、実のお父さんから、リリーのことを聞いたんだ。それで」

アテナ「お亡くなりになっているとは知らなかったの」

コハク「僕もです。父は、父は元気なんですか？ガルルたちについていけば、父に会えるものだと思っていた・・・」

クリムト「すまない。君の父であるマーベリックは死んでしまった。ガルルに殺されてしまったんだ。君を連れていったのは、君の父をおびき出すためだった」

コハク 「そうだったのですね」

コハク、すこし沈黙する。

コハク 「マーベリック。それが父の名前なんですネ」

クリムト 「そうだ」

全員、沈黙する。

コハク 「僕は、独りになってしまいました。父と母を失い、故郷も失ってしまった」

アテナ 「バック夫妻は、あなたの帰りを待っているはずだわ。悪い狼たちも退治した」

コハク 「(うつむいて) 僕に帰る場所はない。そんな予感のようなものがするんです。きっと僕は孤独であることが運命づけられているんです」

クリムトとアテナ、沈黙する。

クリムト 「もし、クンカ・クンカ村に帰らないのであれば、ここに住んでみてはどうだい？

ここにいれば、仕事に困ることもないだろう」

コハク 「ええ、そうしようと考えていたところですよ」

アテナ 「私たちもここにいますわ。何か困ったことがあったら頼りにして」

コハク 「ありがとうございます」

クリムト、アテナの肩を叩く。

クリムト 「コハク、私たちはもう行くよ」

コハク 「そうですか。僕はもう少しここにいます」

アテナ 「元気出してね」

コハク 「ええ。僕は、大丈夫です」

と言って、目から涙がこぼれる。

クリムト 「あとで、私のアトリエに来てくれないか。君の肖像画を描いてあげるよ」

コハク 「楽しみにしています」

と言って、笑みを見せて、涙を拭く。

墓地では、白いユリが風に揺れている。

6・4〇ハウフル城 城下町 (夕方)

クリムトとアテナ、城下町の道を歩いていく。

クリムト「アテナ」

アテナ「何？」

クリムト「人間というのは孤独な生き物なのだろうか？」

アテナ「究極を言えば、ね」

クリムト「やっぱり、そうか」

アテナ「私はあなたの夢を見ることはできないし、あなたは私の夢を見ることはできない。相互不可侵。でもそれでいいのよ。だからこそ個人は存在し得るわ」

クリムト「でも、自分が見ている夢に、押しつぶされそうな不安を感じることがある。この夢の中には誰も来られないと思うと怖くなるんだ」

アテナ「あなたは大丈夫よ」

クリムト「どうして？」

アテナ「不安なときは、私のことを思い出して欲しいの。そうすればあなたは独りじゃないわ。私はあなたの庇護者。あなたの夢は私が守る」

クリムト「わかったよ。俺は君を信じる」

アテナ「コハクの絵、描くのね？」

クリムト「ああ。彼の孤独を永遠にこの世界に留めておきたいんだ」

アテナ「ええ。きっとコハクも喜ぶでしょう」

クリムトとアテナ、しばらく沈黙して歩く。

アテナ「お腹、空いたね」

クリムト「そうだね。今日の晩御飯は何にしよう？」

アテナ「ローレイ軒のシチューが食べたいなあ。あそこのシチュー、絶品なの」

クリムト「よし、今日はそこにしよう」

アテナ「うん」

クリムトとアテナ、歩いていく。